

編集後記

▼大変お待たせ致しました。「現代宗教研究」第四十三号をお届けします。

▼平成二十年九月の中央教化研究会議での、保坂俊司先生（中央大学大学院教授）、西山茂先生（東洋大学教授）の基調講演を収録しました。保坂先生の「国家と宗教」は、日本が近代化を行うにあたって「宗教」をどう扱い、それによって如何なる問題が生じて来たかを分析されています。そして、その問題を克服する「仏教文明」再構築へのご提言には、大いに勇気づけられました。西山先生の「『立正安国』は如何に伝えられて来たか」は、客観的立場から、本宗の立正平和運動、創価学会の国立戒壇建立運動などを中心として、戦後の「立正安国」への取り組みを概観しています。更に、ご自身が推進されている「本化四菩薩プロジェクト」に言及しつつ、今後の日蓮門下の活動が目指すべき方向への有意義なご提案を頂きました。中でも印象に残ったのは、宗門運動が「アリバイ作りに終わって来ていないか」との耳の痛いお言葉でした。「立正安国・お題目結縁運動」を、胸を

はって反論しうる運動にしてゆかなければ、と思わずにはいられませんでした。

▼近年頻発する巨大地震は、被災後に、被災者・支援者の双方が抱える多くの問題を浮き彫りにして来ています。平成十九年度の教化学研究会からは、建築構造学や住宅の耐震性を専門にご研究されている、工学院大学工学部教授宮澤健二先生の講演と、NPO法人災害危機管理システムEarth理事長であり、大規模災害での被災者支援や、危機管理の講習会等の開催などの活動をされ、本宗の防災・危機管理の部門での指導的立場に立たれている石原顕正師（山梨県甲府市本立寺住職）の講演を収録いたしました。阪神大震災の記憶の風化が言われつつある今日、是非ご注目頂ければと存じます。

▼研究ノートは、主として研究員諸師のそれぞれの研究成果を収録しております。これは概ね現宗研の「研究例会」において研究発表されたものです。

▼研究・調査プロジェクトは、平成二十一年度より、研究調査体制を組み替えるべく、本年度これまでの研究調査分担を一区切りとするため、今号では、それらの包括

的な報告を掲載しました。

▼教化学研究発表大会は第九回目を数え、試験的に行った試みがあります。一つ目は、より多くの発表者への対応の為、午前中のみですが発表会場を二部会制としました。不慣れのため、多少の混乱はありましたが、更にくの方に発表して頂けるようにして行ければ、と考えております。二つ目は開教布教センター長の平井智親師による特別発表です。師の講演録中にも述べられているように、当日、平井師はアメリカ合衆国カリフォルニア州の開教布教センターにおられました。インターネットを利用して、会場のスクリーンに平井師の姿を映し出し、ご発表頂きました。その内容についても、海外布教における現状での問題点、今後日蓮宗が世界宗教として発展していく為に留意すべき点など、「現場」にいる方ならではの、まさに「教化学」の見地からの発表でした。是非とも御高覧下さい。

▼彙報に記しました通り、年度初めに所員一名が新たに配属されました。年度途中で、一名が総合相談所へ転属、替わって一名が伝道部より転属となりました。研究員に

ついても七名が新たに加わり、一層の研究・調査活動の充実に向けて取り組んでおります。
(櫻井義久)